The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	つながりを育み、受け継ぐ : 野田村から考える、災害復興の先にある関係人口の新たなあり方
Author(s)	大﨑, 修平; 福井, 悠斗; 薮本, 佳奈 他
Citation	未来共創. 2025, 12, p. 233-252
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102527
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

報告

つながりを育み、受け継ぐ
―野田村から考える、災害復興の先にある関係人口の新たなあり方

大﨑 修平
大阪大学大学院人間科学研究科
福井 悠斗
大阪大学大学院人間科学研究科
薮本 佳奈
大阪大学大学院人間科学研究科
劉 牧陽
大阪大学大学院人間科学研究科

1. はじめに

東日本大震災から13年が経ち、震災の記憶は今も様々なかたちで人々のなかに残り続け、新たな変化や成長を見据えた創造的復興が進められている。一方、被災地では震災復興だけでなく少子高齢化や人口減少等、日本全体で生じている課題にも直面している。震災の経験を次世代に継承すべく行われてきた様々な試行錯誤は、村の誇りを確かめ、新しいまちづくりへとつながっている。

岩手県九戸郡に位置する野田村も震災から復興をとげつつ、人口減少や後継者不足等の課題に直面する地域の一つである。筆者らは大阪大学大学院人間科学研究科にて開講されたコミュニティ・ラーニング特定演習の一環で、「関係人口」をテーマにフィールドワークを実施した。本稿では、その概要をまとめ、野田村における関係人口の内実や活性化に向けた方策について考察する。

u250973c@ecs.osaka-u.ac.jp（大﨑）

2. フィールドワークの概要

2.1. 野田村を取り巻く現状

野田村は、海と山に囲まれ風光明媚な景観や豊かな自然が愛され、村民の生活を支えてきた。三陸海岸に面し、過去100年間にしばしば津波の被害も受けてきた一方（野田村観光協会・野田村 2015）、ホタテ貝やワカメ等の水産業や、やませによる冷涼な気候を活かした山ぶどう栽培、村土の85%以上を占める山林等による農林水産業が村の基幹産業となっている。近年は近隣市町村への第三次産業就業者が増加し、農林水産業等の第一次産業の振興は地域産業の育成や地域活力の原動力としても重視されている（岩手県野田村 2021）。

人口は2024年1月時点で3975名であり（総務省 2024）、1970年の5863人をピークに減少傾向が続いている。特に、年少人口と生産年齢人口の減少が著しく、人口動向は男女ともに「15 ～ 19歳→20 ～ 24歳」の年代で大幅な転出超過となる一方、「20 ～ 24歳→25 ～ 29歳」にかけて転入超過となり、大学卒業等のタイミングで村に戻る傾向がある。しかし、全体では転出超過であり、男性は進学や就職に伴う県外への転出、女性は就職や結婚に伴う県内への転出が多い傾向がある（岩手県野田村 2016）。

第1次産業における就業者の高齢化や就業人口の減少が進むなか、後継者不足や労働力不足に伴う生産量の低下、そして個人消費や地域内消費の縮小による地域経済の縮小等が懸念されている（岩手県野田村 2016）。

2.2. 「関係人口」とは

関係人口とは、人口減少とともに一部地方で進む過疎問題からどのように地域を再生させるか議論するなかで生まれた概念である（田中 2021）。地域に住む人々だけでなく、地域に必ずしも居住していない地域外の人々にも地域の担い手としての活躍を促すことが、地域活力の維持・発展に必要不可欠とされ（内閣府 2020）、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を関係人口と呼ぶ（総務省 2018）。この背景には、これまで定住人口の増加を目指す各自治体間で移住者を奪い合う人口獲得合戦が繰り広げられた一方で、都市農村の交流促進は地域側が消費され一過性の関係に終わる「交流疲れ」が報告されるという関係構築における失敗の歴史がある。そして、つながりや関係に価値を置く都市住民や若者が増え、それらを地方に

求める動きに呼応し、関係人口には量ではなく個々人の関係の質を意識した関係の再構築によって地域再生主体の確保を目指す意味があると指摘されている（田中 2021）。

新型コロナウイルス感染症流行以降の新しい地方創生の実現に向けた今後の政策方針を打ち出す第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2020改定版）において、こうした人の流れは、「ひと」が「しごと」を呼び込み、「しごと」や「まち」の魅力が「ひと」を呼び込むといった、「しごと」「ひと」「まち」のそれぞれを起点とした多様なアプローチによる三者の好循環を支え、またそれによって作り出されるものである（内閣府 2020）。

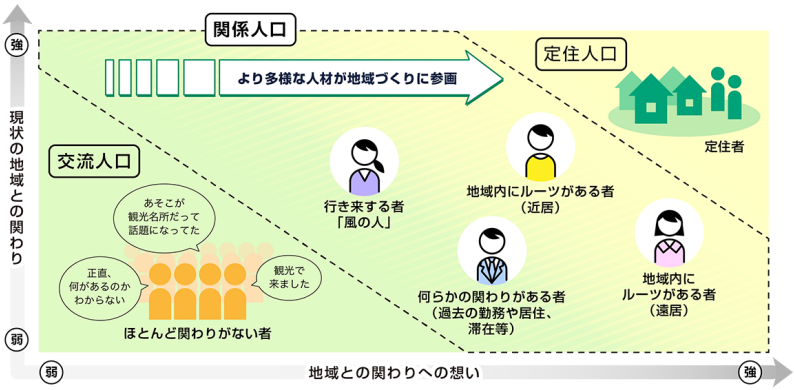

図1　関係人口の概念図
（総務省 2018）

2.3.　野田村における取り組み

「第2期野田村まち・ひと・しごと創生総合戦略」（岩手県野田村 2023）では、「野田村への人の流れをつくる」施策がまとめられている。そこでは、第1に村の海・山・里の文化を活かした観光地づくりや、みちのく潮風トレイルや三陸復興国立公園等の市町村域や県域を超えた広域観光の推進、第2に村の資源を活かした体験プログラムや震災学習、大学・企業等民間団体との交流事業、ワーケーションやサテライトオフィスの空間整備等による交流活動の推進、第3に住宅・住環境の整備が挙げられている。また、震災以降も野田村との「つながり」を継続するために始まった野田村独自の準村民登録制度「心はいつものだ村民」は、

「野田村のことを『心のふるさと』のように感じてくれる村外の方」なら誰でも登録できる制度で、村長直筆の木札が登録証として交付される。

筆者らは事前に、村役場未来づくり推進課の日形井賀友樹さんから全国的に人口減少が進む中での関係人口の重要性と「野田村に来たくなる、また訪れたい、野田村を応援したいと思える仕組み」への期待を伝えられる。そして、現地で参加させていただいた防災学習ツアーで、同課の廣内鉄也さんは最後に「『野田村にとっての成功』って何だろう」と題し、

> 「『地方でもできる』ではなく『地方じゃないとできない』、『小さくてもできる』ではなく『小さくないとできない』」。そんな視点も持ちながら、野田の人が「やれそう」「やってみよう」と思えて、かつ独自の地域活性化につながる提案を期待しています。」

と述べられる。野田村にとって「関係人口」とは何か、村民の参画や村の独自性も踏まえた提案が求められていたようでもあった。

3. フィールドワーク内容

本章では、野田村村民や村役場職員、計10名の方へのインタビュー内容を報告する。表1にフィールドワークの日程を示す。インタビューに際しては、関係人口の調査テーマを伝え、事前に作成したインタビューガイドに基づき、半構造化インタビューを実施した。

野田村未来づくり推進課　日形井賀友樹さん

野田村役場の日形井さんは、「関係人口」をフィールドワークのテーマとして提示した方である。どの市町村も人口が減少し、野田村でも高齢化が進む中、他と同じ施策をしても上手くいくのか、村内移住先の場所や人員確保等の難しさからその対応や村の存続に危機感を抱いていた。そうした中、震災を機に出会った様々な人とのつながりが今も続くことから人を大切にする関係人口に期待を寄せている。

元々、野田村出身の日形井さんも震災を経て「村のために何かできることはないか」と考え役場職員になった。村外にいた頃、地元からの電話の後ろで幼

表１　フィールドワークの日程

日程	時間	場所	活動内容
8 月 18 日	9:00 ~ 11:00	野田村	防災学習ツアー
	14:00 ~ 15:00	庵日形井	内野澤進さんのお話
8 月 19 日	10:00 ~ 12:00	野田村	野田村の散策・図書館で文献調査
	13:00 ~ 14:30	野田村役場	日形井賀友樹さんにインタビュー
	14:30 ~ 16:00	野田村役場	廣内鉄也さんにインタビュー
8 月 20 日	11:00 ~ 12:00	野田港	安藤正樹さん・安藤智子さんにインタビュー
	13:00 ~ 14:00	野田村役場	木村剛さんにインタビュー
8 月 21 日	9:00 ~ 10:30	スマイル直売所	米田やすさんにインタビュー
	13:00 ~ 14:30	のだ塩工房	野竹長吉さんにインタビュー
	15:00 ~ 16:00	農家食堂つきや	小野寺信子さんにインタビュー
	15:30 ~ 17:20	苫屋	坂本充さん・坂本久美子さんにインタビュー

少期から聞いていた蛙の鳴き声が聞こえ「なんか帰ろう」と思い至ったという。これまでの事業の中で震災後に結ばれた大阪大学との「OOS 協定[1]」では、10 年後に他の市町村では真似できないユニークな村にするテーマを掲げ様々な取り組みが行われてきた。また、「心はいつものだ村民」を例にお互いにいい距離感でいる魅力について話し、人と人が自然と上手く関われる仕組みができること

写真１　防災学習ツアーでの日形井さん

を期待する。普段は広報を担当し、本来は村の歴史等の特集を組み広報誌を通した世代間交流も模索するが時間や予算の現実的な難しさもあると語られる。

野田村未来づくり推進課　廣内鉄也さん

野田村生まれの廣内さんは盛岡市の大学を卒業後、一度は民間企業に勤めるも偶然村役場の職員募集を目に「何かの縁かな」と思い村へ戻った。

20年以上仕事を続ける中で、田舎の小さな村である野田村には元々「シャイな」人が多く閉鎖的な雰囲気もあったが、震災を機にそれが明らかに変わった。そして、最初は支援する側とされる側のある種上下関係があったが、次第に両者が仲間のようになり、以前から村にあった人とのつながりが野田村の支えになっていたことに気付かされたと話す。

現在、担当の「心はいつものだ村民」は震災以降に始まったつながりの見える化事業であるという。一時期は登録者数の増加が目的化し本質が見えにくくなる難しさもあったそうだが、今年度は全く知らない人からの申請も増え、新しいフェーズに入ったのではないかと感じている。「小さな野田村だからこそできること」と廣内さんは野田村で働くことにじわじわ面白さを感じていた。

写真 2　廣内さんへのインタビュー

安藤智子さん・安藤正樹さん

安藤夫妻は二人とも野田村出身だ。智子さんは高校卒業後に東京で調理師免許を取得し、震災を機に野田村で自身のレストランを開業され、今はいわて水産アカデミー生として水産業の知識や技術も学ばれる。正樹さんは家業のホタテ養殖を引き継ぎ、震災後、ホタテ養殖やホタテ祭りを手伝ってくれた学生ボランティアの助けをありがたく感じていた。

現在、3人の子どもがいる安藤夫妻は、野田村には子どもたちが「みんなの子どもとして育てられる」温かい環境があり、ここで自分たちの子どもを育てたいと考えている。村全体や海を一望できる風景や歴史を感じさせる豊かな自然があり、智子さんは「来てくれた皆さんに楽しんでもらいたい」と村への愛を窺わせる。しかし、交通量が少なく24時間営業の店が近くにない不便さや、子どもが遊べる公園が近くにないため子どもをおいて仕事ができない難しさがあるという。関係人口への期待を尋ねると、自分たちは生活以外のことは余裕がないため、外からの人が主体的に村のための企画をすることを歓迎されていた。

写真3　安藤夫妻と野田漁港にて

写真 4　野田湾沖合から見た野田村と安藤正樹さん

ベアレン醸造所・地域プロジェクトマネージャー　木村剛さん

木村さんが野田村とつながる大きな契機となったのは、自身が立ち上げたベアレン醸造所の10周年に岩手県の全33市町村でビール祭りを企画したことだった。その最初の開催地が「いつの間にか」関係があった野田村だった。元々、盛

写真 5　木村さんと村役場にて

岡市で生まれ育ち、地元の人に親しんでもらえる地ビールを作りたいと思い、酒造会社での勤務や酒税法改正を経て醸造所を立ち上げた。売上が落ち込み、販路拡大に苦労した時期もあったが、飲み手と作り手の距離が近い分、人口が少なくても親しんでもらえれば経営はむしろ安定すると考えた。毎週盛岡材木町よ市に出店していると、地元の知り合いを通じて徐々に常連客のネットワークが広がり、売上も増えていった。

会社を2年前に引退し、昨年10月からは野田村の山葡萄ワイナリーに地域プロジェクトマネージャーとして携わる。移住者として昔から住んでいたかのように地域に溶け込みたいと思う一方、時間の感覚は人それぞれだからこそ、外から来ても自分のペースで馴染んでいくのが一番良いと述べられる。

スマイル直売所　米田やすさん

「人の顔を見れるから」と米田さんが週1日スマイル直売所で販売する豆腐田楽は、村内に限らず隣接地域からも多くの人が食べに訪れる。米田さんは村の中心から少し外れた集落に住んでいた頃、「みんなを豊かにしたい」思いから高

写真6　米田さんとスマイル直売所にて
（奥の左から2番目が米田やすさん）

齢で家にこもりがちであった近所の農家を集め農業を営み、27年前に産直を立ち上げた。しかし、その産直は震災の津波によって悲しくも流される。

震災時、米田さんは避難所に米がないとわかると同じ農家の米田さきさんと一緒に、自らの米や豆腐等の温かい食事を届けた。食事は感謝を示すため外からきたボランティアにも届けられ、先行きが見えない中でも「困ったらみんなお互い様。だから全然怖くない」と振り返る。「よその人ってどこがよその人だがわかんない。みんなお友達」。津波によって村民がいろいろな人と付き合えるようになり、県外からはやすさんと出会い結婚や出産の報告に野田村を訪れる人もいるという。

豆腐作りは今も集落内外の若者の参加のもと続けられ、村の食文化を支えている。最後には若者が野田村に移住し、村に新たな価値をもたらすことを笑って期待されていた。

のだ塩工房　野竹長吉さん

東京で働いていた野竹さんは震災から2週間後に野田村へ戻ると「村に入った瞬間もう東京には戻れない」と感じたという。村の壊滅的被害を目の当たりにし、家族や村のために自分の大工としての技術を活かすと決め、野田村での生活を再び始めた。

震災翌年、のだ塩工房に採用され塩づくりを始めた。のだ塩は江戸時代まで

写真7　のだ塩工房の野竹さん

遡る野田村の伝統産業であり、村外から多くの人が塩づくり体験や工房見学に訪れる。日本中の人に「おいしい」と喜ばれる言葉が励みになり、関心を持って訪ねて来る人に「『大変ですね』って言われるのが楽しみ」。東京にいた頃は祭り等で定期的に野田村に帰っていた。そして「帰ってきたか？　一杯やろうよ」と言い合える人の温かさや、小さい村だからこそ他の漁師と毎日「大変だな、ご苦労さん」と繰り返し苦労を分かち合える良さを話す。

一方、村には大学や大企業もなく仕事を見つけるのが難しいため、子どもに地元に残ってほしくても簡単には言えない。今は塩の製造過程で大量に出るニガリの活用方法やお酒がやめられないことに本気で悩まれていた。

農家食堂つきや　小野寺信子さん

小野寺さんは生まれも育ちも野田村で、現在は「農家食堂つきや」や民泊の運営をされている。保育所の調理師であった経験から食べ物が健康に与える重要性を強く意識し、「『食の安全』や『食の大切さ』を伝えたい」と経営理念に掲げられる。震災後、ボランティアが夏の暑い中でも津波後の片付けを続けてくれたことに感謝し、食事だけでもゆっくり楽しんでもらいたいと思い場所を開放し

写真 8　小野寺さんと農家食堂つきやにて

た。その経験が後の農家食堂を開く契機となった。

しかし、その食を支える農業は高齢化や人手不足が深刻化し、国の政策の急激な変化に対応が難しい現実もある。小野寺さんの周りでは、繁忙期には15名程が協働して農業を営む。震災後に小野寺さんが声を掛けて集まった方が多く、身内ネットワークのような感覚でつながっている。主に野菜の栽培から加工・出荷までを他家の栽培作物や産直の在庫に応じて調整し行なっているという。

また、こうしてインタビューを受けたり、発起人として調整の連絡をしたりするにもエネルギーが要る。他の村民は「もう私（小野寺さん）がいるからってあんまり関わらない」「ナイーブな人も多い」と笑いながら寂しさも窺わせる。「今80歳、でもまだまだ元気で働けるんだよ」と次のレシピを考えつつ、事業の後継者にも頭を悩ませていた。

苫屋　坂本久美子さん・坂本充さん

「毎日深呼吸しながら生きている」「心がだんだんと浄化されていった」。それまでの海外勤務や大都市での生活を経て、坂本夫妻は野田村での静かで平和な生活をこう表現する。32年前、キャンピングカーで野田村に訪れるとアジア民

写真９　坂本夫妻と苫屋にて

族造形館の運営者から「民泊をやらないか」と誘われた。一日考えて承諾し野田村での生活が始まった。坂本夫妻が営む苫屋は電話やインターネットがなく手紙かハガキで予約をとる。

久美子さんは今もなお目を輝かせ、野田村には「真似できない自然」と「言葉にできない笑顔」を持つ人、そして人とのつながりが「線ではなく面になる」魅力があると話す。引越してすぐのある朝、玄関前に夕顔があり隣家を尋ねるとお裾分けとのことだった。「次からは玄関の鍵を閉めないで。家の中にお裾分けを置けないから」と言われ、以降も様々なことを教えてくれたという。

「自然の良さが分かる人に来てほしい」が、それだけでは生活できないとも充さんは言う。「企業がないから自分で何かを始めないと生活も成り立たない」。「ここが良い、来て」と誘いたいが村の多くの空き家は仏壇があり使えないとも話された。

4. 野田村における関係人口

4.1. 野田村のつながり

本章では、野田村における人のつながりや関係性について考察する。ベアレン醸造所の木村さんは「全部固有名詞でお話が進む」ほど「ほぼ村の人は全員知り合い」と言う。スマイル直売所の米田さんやつきやの小野寺さんの元には村内外から人が集まり、ネットワークのハブとなるようなその求心力や、声をかけると協働できる密接なコミュニティの存在も窺われる。一方、どんなに個人的なエピソードを語っても最後は「でも、おかげさま」と話す。この背景には毎日苦労を共有し、「困ったらみんなお互い様」と震災時には食事を分け合うといった、野田村に昔からある相互に気遣い、助け合いながら共に困難を乗り越えてきたという密接なつながりがあり、それが生きる力にもなっている。

つながりには人に限らず、モノも重要な役割を果たしている。つきやの従業員の方に産直ではどの商品にも生産者の名前が付記されることを尋ねると、生産者の名前で購入される人もいるという。また、村役場の日形井さんが蛙の鳴き声を聴いて帰郷に思い至り、のだ塩工房の野竹さんが震災で自分にできることはないかと村に留まったことには思いやりだけでなく、村への愛着の強さも窺える。村民が口を揃えて言う「野田村が好き」は、私たちがつながるための十分なきっかけになるのだ。

4.2. つながりの形成

野田村でのつながりは「いつの間にかつながっていた」ほど、自然に形成されてきた。すなわち、野田村には昔から“よそ者”とも言える外からの人を受け入れる器の広さがあった。野田村に入り間もなくお裾分けを受けた苫屋の坂本夫妻は、元々、野田村村民はよそ者を自分たちの社会の中に包摂する文化を持ち、震災以降、外から多くの人と関わり慣れたことで、それがより顕著になったと感じている。

また、ベアレン醸造所の木村さんは場作りの重要性を盛岡市よ市の出店から以下のように振り返る。

> お客さんの飲み方を見て気づいたのが、みんな共通の趣味とか話したり、元々全然知らない同士の人がたまたまそこで毎週ビール飲むうちに、知り合いになって、お客さん同士のつながりみたいなのが、だんだん自然発生的に、こっちはほぼビール出してるだけだけど、出てきて。ビールって味もそうなんだけど、ビール飲んでいろんな人とつながったり、楽しい時間過ごしたり、そういう場作りが大事なんだなと。そういう場所をたくさん作ろうと……

震災を機に、村民は主にボランティアとしてきたよそ者と復興に向けて助け合い、食事や寝床ももてなされ、開放的になった。それは震災から生まれた交流の場で野田村の包摂性が拡大された過程であったと言える。

筆者らを村民とつなげていただいた村役場の廣内さんによれば、インタビューに応じられた方は皆様「よそ者ウェルカム」だが他の方はどうかわからない。「シャイ」な方も多く、村役場の日形井さんは村の魅力である距離感の近さはあくまで身内ゆえであるからこそ、

> やっぱお互い一歩踏み出せば、良くも悪くもいい距離感になれるかと。

と背中を押す。すなわち、仮に初めは外からの関係人口に対し協力がないように見えても、互いに一歩を踏み出し時間を共有していけば、1つの運動は地域全体を巻き込んで発展する可能性がある。

また、つながりは1対1の関係から生まれ「100人いたら100通りのつながり

方がある」が「分かりやすい例だけじゃない所に本当のつながりの価値はある」と廣内さんは強調する。

> 1対1がだんだん2対2、3対3に、来ているうちに何か点が線になって面になって、みたいなことがあると思う。だから、今わかりやすい例としてある日のイベントとかの話をしてますけど、結局はそれが行われる当日だけで成り立つんじゃなくて、1年365日の他の364日の付き合いがあるからその日があるんです。そうなるまでにはやっぱり繰り返し関係性が続いているゆえに広がりがあって、今になることかなと思います。

1対1の関係を支えるのが、野田村のつながりの文化や村民一人一人の人としての魅力でもあるだろう。「言葉にできない笑顔」とも表現される温かさが野田村にある。よそ者でも最初から身内のように感じさせてくれる包容力や居心地の良さを筆者らも感じていた。その文化は脈絡と受け継がれているからこそ、安藤夫妻は自分の子どもも野田村で育ってほしいと願う。

一方で、筆者らが今回インタビューに伺ったのは、関係人口と特に関わりが深い方でもあった。つきやの小野寺さんは、毎年大阪大学の学生が野田村を訪れる度にお話を伺う機会が多いが、小野寺さん曰く、他にも話せる村民はいるが、高齢化が進み自分の仕事を優先して外部との関わりは消極的になる方もいる。

> 私みたいなのは特別な目で見られている感じだから、お前はでぎんだべぇったって、オラはできねぇよって感じで。一緒にやってみっかっていうのはなかなか難しい。

ここから示唆されるコミュニティに入り込まなければ外からは見えにくい村民の存在とその方が抱える課題は、安藤夫妻やのだ塩工房の野竹さんが語る生活や健康上の悩みからも推し量れる。フィールドワークでは上述の問題意識から中心的ではない村民を尋ねようとしたが、村役場からは連絡が難しく村民同士のつながりに頼る必要があった。すなわち、野田村に住むほど積極的に参入しようとしない限り、生活上の様々な困難によって外とつながりにくい村民もいる。そのため、現状のままでは関係人口のような人々が野田村の相互扶助のコ

ミュニティに巻き込まれるには難しさもあると想像される。外からの関係人口の窓口や今の後継者を増やすためには、その生活背景にも意識を向ける必要がある。

4.3. つながりがもつ可能性

野田村における村内外のつながりは、限られた資源で効果的な施策を打ち出す上で重要な資源として位置付けられてきた。そのつながりは、震災時のボランティアによって活性化され、直接ボランティアを必要としなくなった現在でも変わらず、災害復興や村民に活力をもたらしている。村役場の廣内さんによれば、人と人のつながりは、各々が持つ能力や人脈、時に財力（お金）などを与え合うことでもあり、それが地域づくりに生きているシーンが多くある。例えば、ベアレン醸造所10周年記念以降、今も毎年野田村ではビール祭りが開催されている。そして、800名程の来場者のうち半分が村外からで、こうした大規模行事が「つながり」をベースに成り立っていることを考えると、そこに本来かかるはずの予算やマンパワーをつながりが補っているともいえる。村が、人と人が自然に関わる仕組みづくりを重視する理由の一端が垣間見える。

そして、令和6年時点で1300人以上が登録する「心はいつものだ村民」は、直接的な資源以外に、つながりがもたらす可能性を最大限に信じるものでもあるだろう。廣内さんは続けて話す。

> （準村民制度は）つながっていること以上のものを過度に求めてないんです……心の片隅で、野田村のことを気にし続けてくれていたら嬉しいなぁっていう。自然な形で。時には自分の仕事や生活が大変かもしれない。でもつながり続けていたらいつかまた戻ってくるとか……割とわかりにくくて高度かもしれないけど、意図しているものなんです。

野田村では人やモノを通じた直接的・間接的なつながり、見える・見えないつながり、過去から未来に続くつながりという多層的なつながりが外部の関係人口にも開かれて存在している。そして、それが何より野田村の誇りとなり、村民の主体的な生活を支えている。そこからつながった人々は野田村で自分の役割を見出し、新たな人生を歩み始めた。震災から13年が経ち、災害ボランティアへのニーズが減り、新型コロナウイルス感染症によって交流そのものが希薄

化するなかで、関係人口には自然とつながり続け、それぞれにできるかたちで新しいつながりを創出する願いが込められている。

5. 提案

野田村と既存の関係人口の内実を踏まえ、改めて一般論としての関係人口論を参照し、提案を方向づける。関係人口の概念から「地域再生主体」という地域活性化の担い手の創出過程を分析した田中（2021）は島根県海士町、島根県江津市、香川県まんのう町の3事例から以下のような過程の共通性を見出している（表2）。

一般に「関係人口の活性化」が目標に課せられる際、第1ステップの前段階であることが多い。つまり、何でも良いから外からよそ者が入りステップ2・3に繋げてほしいといった状態である。対して野田村は地域のよそ者の受け入れ体制が整っており、明らかに進んだ段階にある。

よそ者を受け入れる体制の有無が関係人口による地域活性化に与える影響は大きい。一般に、ステップ1から始める地域活性化はステップ3に至るためのハードルが高い。島根県隠岐郡海士町は日本全国でも地方活性化の先駆的事例であったが、最初から順調だったわけではなく、事例中の関係人口は当初町民の理解と協力が得られず一度は帰ろうかと思ったほどである（田中 2021）。しかし、野田村の現状を見ると、関係人口を受け入れ何でもやってもいいという器の広さを備え、その包摂に優れていることが分かる。それは震災以降も続く多くの関係人口との交流のみならず、苫屋の坂本夫妻が語るよそ者をもすぐに包摂できるような、野田村に元からある相互扶助の文化によるものでもある。

以上を鑑み、野田村の「関係人口の活性化」に向けて関係人口の数を増やす

表2　地域再生主体創出過程（田中 2021）

第1ステップ	関係人口が地域課題の解決に動き出す
第2ステップ	関係人口と新たな地域住民の間に信頼関係ができる …地域住民が自分たちこそが地域課題を解決する当事者であることに気づいていて主体性を獲得していく
第3ステップ	主体性を獲得した地域住民が地域課題の解決に動き出す …新たな地域住民や関係人口と信頼関係を広げ、地域課題が解決されていく

のではなく、既存の関係人口を地域活性化により巻き込む方針から提案を行う。第1は、生産面、消費面の促進から既存の関係人口を巻き込む「関係人口持続モデル」である。「しごと」から「ひと」を呼び込むように、生産面では村内外の関係人口による村の利益に帰する起業支援を行う一方で、消費面では関係人口と地域住民の交流機会を創出する中で、地域内の消費量を増加させ、既存の関係人口とも関係を深め、地域活性化に寄与することが期待できる（図2）。

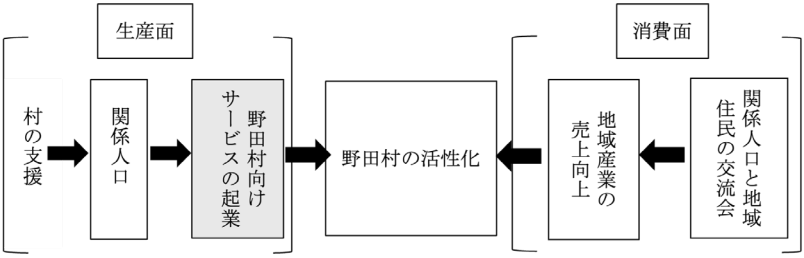

図2　関係人口持続化モデルイメージ

第2の方策は野田村の内側を整え強みを活かすことで、野田村の「ひと」や「まち」から「ひと」の流れや「しごと」を創出するものである。「ひと」の魅力をさらに活かすためには生活上の様々な悩みが課題となる。コミュニティ内に埋もれやすい方に、関係人口が村民とつながれる可能性があるとすれば、例えば、既存の21世紀むらづくり委員会やハブ的な村民とそのネットワークを活用し、村役場等が定期的に村民の悩みを集約する仕組みを設ける。その上で野田村のつながりや全戸配布の広報誌を活かし、村役場ではなく村全体や関係人口に悩みを投げて解決を委ね、再び集約した方策を共有する。その過程で実際に悩みが解決せずとも「固有名詞でお話が進む」からこその具体的な提案が生まれたり、高齢世代が持つ昔ながらの知恵や村の誇りを再発掘できたりすれば「まち」の魅力につながり、ニーズが生まれれば「しごと」が生まれると考えられる。そして、外からの関係人口も野田村と関わる方向性が具体化されて、動機づけを高めるだけでなく、村内で危機感が共有されることで関係人口との協働に求められる村民の新たな主体性も期待できる。例えば、のだ塩の製造過程で出るにがりは、

田楽豆腐で知られる豆腐を固めるのに使われるが、その他の活用方法へのニーズは村外の技術や知恵が貢献できる余地がある。

地方でないとできない、小さくないとできない、また野田村だからできることとは人の魅力やつながりを存分に活かし、「野田村」を通じてつながる人が、つながりの力と自らの生き方を再発見することでもあるだろう。

謝辞

フィールドワークにあたり、お忙しい中、インタビューにご協力賜りました野田村の皆様に心より感謝申し上げます。また、本報告では取り上げられませんでしたが、野田村を最初にご紹介いただき、美味しいお食事にも招待いただいた貫牛利一さんをはじめ、まちゆく筆者らを温かく見守り、野田まつりにも参加させていただいた村民の方々、そして、1週間以上に渡り生活を支えていただきました先生方、全ての皆様に深くお礼申し上げます。

注

1　OOS（大阪大学オムニサイト）は2017年4月に始動した大阪大学人間科学研究科附属「未来共創センター」のプロジェクトの一つであり、支え合う社会、共生社会を創造していくための新たな共創の仕組みである。

参照文献

岩手県野田村

2016「まち・ひと・しごと創生　野田村　人口ビジョン」 https://www.vill.noda.iwate.jp/material/files/group/20/9327download.pdf（2024/10/30アクセス）

2021「野田村過疎地域持続的発展計画（令和3年度～令和7年度）」 https://www.vill.noda.iwate.jp/material/files/group/4/11987download.pdf （2024/10/30アクセス）

2023「第2期野田村　まち・ひと・しごと創生総合戦略」 https://www.vill.noda.iwate.jp/material/files/group/20/02sougou-senryaku.pdf
（2024/10/30アクセス）

総務省

2018「地域への新しい入り口　関係人口ポータルサイト」 https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html（2024/10/30アクセス）

2024　住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数（令和6年1月1日現在）　https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_02000316.html（2024/10/30アクセス）

田中輝美
2021　『関係人口の社会学――人口減少時代の地域再生』大阪：大阪大学出版会。

内閣府
2020　「第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（2020 改訂版）」　https://www.chisou.go.jp/sousei/info/pdf/r02-12-21-senryaku2020.pdf（2024/10/30アクセス）

野田村観光協会・野田村
2015　「岩手・野田村　震災の記憶」https://iwate-archive.pref.iwate.jp/wp/wp-content/uploads/2017/02/b6f4b8dae0c86bcb3db6b392df6fec89.pdf　（2024/10/30アクセス）